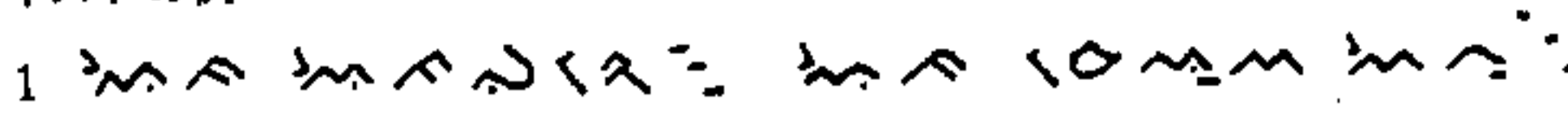





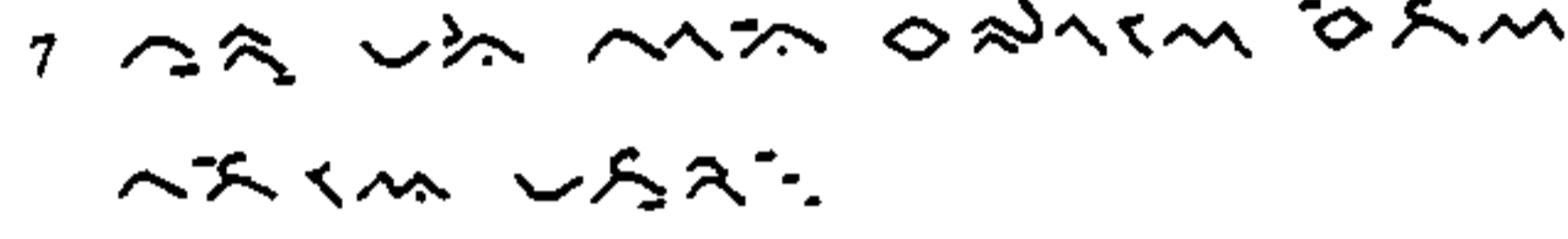
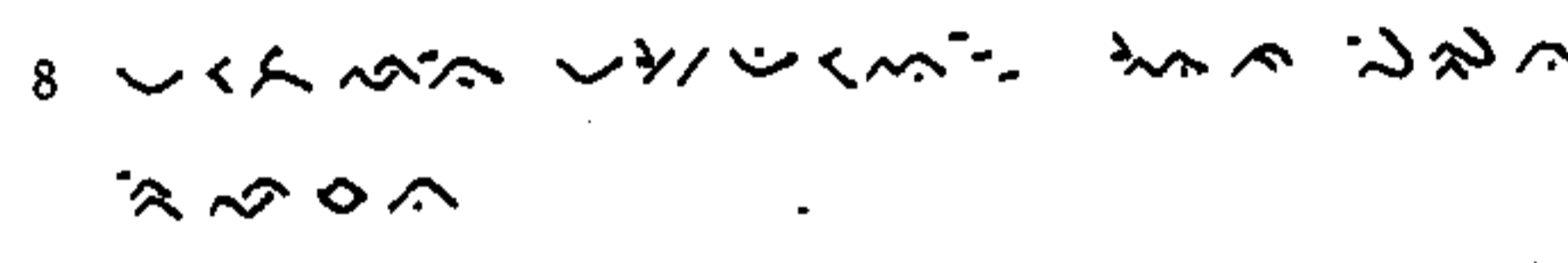



〈図3〉 民話テキストの例

- 1 
- 2 
- 3 
- 4 
- 5 
- 6 
- 7 
- 8 
- 9 

だ王(女)だ。彼女の母には、彼女の父には、(王女は)一人っ子だった。彼女は後継ぎだった。その国のな。ルウのな。彼女の母は悩んだ。彼女の父もな。なぜなら、彼らの子がひどい病気にかかったのだからな。すべての呪師や医師がみんな来て、治療した。彼らは付き添って、こう言った。その皮膚を病んだ王(女)の、彼女の病気には、変化があるだろう(と)。

【参考文献】

- Chairan, Tamin et al. (1981), *Bunga Rampai Sastra Bugis: Bacaan Sejarah Sulawesi Selatan* (Departemen Pendidikan Dan Kebudayaan, Jakarta)
- Hamonic, Gilbert (1987), *Le Langage de Dieux: Cultes et pouvoirs pré-islamiques en Pays bugis Célèbes-Sud, Indonésie* (Éditions du CNRS, Paris)
- Kern, R. A. (1939), *I La Galigo; Catalogus der Boegineesche tot den I La Galigocyclus behoorende handschriften bewaard in het Legatum Warnerianum te Leiden alsmede in andere Europeesche bibliotheken* (Legatum Warnerianum, Leiden)
- (1989), *I La Galigo: Cerita Bugis Kuno* (Seri Terjemahan KITLV-LIPI, Yogyakarta)
- Matthes, B. F. (1875), *Boeginesche Spraakkunst* (Martinus Nijhoff, 's-Gravenhage)
- Pelras, Ch. (1975), "Introduction à la langue bugis", *Archipel* 10 (Paris)
- Said, M. Ide (1977), *Kamus Bahasa Bugis-Indonesia* (Pusat Pembinaan Dan Pengembangan Bahasa,

Jakarta)

Sirk, U. H. (1979), *La Langue Bugis* (Cahier d'Archipel 10, Association Archipel, Paris)

【参照】 セレベス文字, マカッサル文字, 東南アジア島嶼部の文字

(柴田 紀男)

^{びつぎょう} 仏教 スゴー・カレン文字 英 Sgaw Karen monastic script → スゴー・カレン文字。

^{ぽうぎょう} 仏教 ポー・カレン文字 英 Pwo Karen monastic script

【概況】 カレン系言語の中で独自の文字をもつのは、スゴー・カレン語、ポー・カレン語(フォー・カレン語)、パオ語(パオウ語)の3言語である。

このうち、ポー・カレン語の文字として外国に比較的よく知られているのは、キリスト教ポー・カレン文字[▽]である(→別項参照)。しかし、ポー・カレン語の文字には、キリスト教ポー・カレン文字以外にも、仏教ポー・カレン文字(図1)とレーケー文字(Leke script)がある(後述)。キリスト教ポー・カレン文字のみが外国によく知られることになったのは、カレン民族が多くキリスト教宣教師たちの記述を通して欧米に紹介されてきたという事情が一因になっていると思われる。

ポー・カレン語は、ビルマ(ミャンマー)連邦カレン州周辺で話される東部方言と、同じくイラワジ(エヤワディ)川のデルタ地帯で話される西部方言の2つに大きく分かれる。東西方言を合わせた話し手の総人口は100万人を超えるとされる。東部方言と西部方言は、相互の理解がほとんど不可能なほど発音・語彙な

〈図1〉 仏教ポー・カレン文字の教科書より

ဟေး စဝ်ပါ၊ ဟေး စဝ်ပါ၊
 စးလဲလုံမာလေိတ်လိက်ခွာ၊
 အေသျှေလိက်အေသျှေလိက်၊
 ချောဟ်ယျာ.ထင်းထင့်မိင်ဖျဟ်ယိက်။

ဟေး ဖျံသီး၊ ဟေး ဖျံသီး၊
 မာလေိတ်ကောဝ်.တယ်လိက်ကောင်.ထီး၊
 နှ်ကု်သာ၊ နှ်ကု်သာ၊
 လုံသျှေလိက်မေံစုဟ်လုက်ခါ။

どの点で異なっている。仏教ポー・カレン文字は、このうち東部方言が話される地域で使われている。そのためビルマでは、仏教ポー・カレン文字を「東のポー・カレンの文字」と呼ぶこともある。

〔起源・歴史〕 東部方言を話すポー・カレン人たちは、圧倒的多数が仏教徒である。彼らは古くから、かつて東南アジア屈指の勢力を誇ったモン人との交流をもち、仏教文化を取り入れた。その過程で、カレン人自身が仏教文書を書くためにモン文字[▼]を改変して編み出したと考えられるのが、仏教ポー・カレン文字である。

この文字の成立は多分に自然発生的であり、正確な起源は分かっていない。伝説の上では、現存するカレン文字[▼]の中で最古のものとされ、何百年も前から存在していたといわれる。けれども、現在残っている最古の文献が1850年代に作られたとされる貝葉^{はいよう}（ヤシの葉に文字を刻んだもの）であることと、文字と発音の乖離^{かいり}の度合いがさほど大きくないことから、そこまで古いものとは考えにくく、どんなに古く見積もったとしても18世紀末が上限であろう。しかし、このような事情を加味しても、西洋の文献によく見られる、1830年代にキリスト教の宣教師によって考案されたスゴー・カレン文字[▼]が最初のカレン文字だとする説は、否定される可能性がある。なぜなら、それより以前に仏教ポー・カレン文字の萌芽があった可能性は十分にあるからである。

この文字が成立した地域は、貝葉の多くがカレン州の州都バアン周辺で見ついていることから考えて、おそらく、この近辺なのではないかと考えられる。

ところで、ここでは、この文字が仏教に関連する起源をもつことから、宣教師が作ったキリスト教ポー・

〈表1〉 子音字母

က	ခ	ဂ	ဃ	င
k	kh	(g)	(gh)	ng
စ	ဆ	ဇ	ဈ	ည
c	ch	(j)	(jh)	ny
တ	ထ	ဒ	ဗ	က
(T)	(TH)	D	(DH)	N
တ	ထ	ဒ	ဇ	န
t	th	(d)	(dh)	n
ပ	ဖ	ဗ	ဘ	မ
p	ph	(b)	(bh)	m
ယ	ရ	လ	ဝ	ဆ
y	r	l	w	s
	ဟ	လ	အ	
	h	(L)	q	
	ဗ	ဟ	ဃ	
	B	hh	ghh	

カレン文字と区別する意味で「仏教ポー・カレン文字」と呼んだが、この名称は決してこの文字に宗教色が強いことを意味するわけではない。事実、キリスト教徒でも仏教ポー・カレン文字を学ぶカレン人は少なくないし、東部地域のポー・カレン人たちはこの文字を単に「ポー・カレン文字」(/láiphlòun/, Pwo Karen script)と呼ぶことが多い。この点、キリスト教徒の間でしか用いられないといってもよいキリスト教ポー・カレン文字とは性質を異にする。

〔発音との関係〕 仏教ポー・カレン文字の仕組みは、他のモン=ビルマ系文字の原則に則っている。すなわち、子音字母の上下左右に母音符号・末子音符号・声調符号などの符号がつき、1音節を表わす。書き方は、左から右へと横に進んでいく。以下では、現代のパアン方言の発音との関係を説明する。パアン方言の音韻表記はKato (1995)に従っている。

1) 子音字母 子音字母は、表1に示す36種類がある。子音字母の種類はこの文字の基となったモン文字と大部分で共通であるが、モン文字に特有な〈mb〉がない点と、逆にモン文字にはない〈hh〉および〈ghh〉の

〈表2〉 母音符号・末子音符号・声調符号の組み合わせ (子音字母〈m〉との結合例)

ꨀ	⟨ii⟩ /-i/	ꨁ	⟨ii=⟩ /-ī/	ꨂ	⟨ii:⟩ /-i:/	ꨃ	⟨ii.⟩ /-i./
ꨄ	⟨uid⟩ /-ɨ/			ꨅ	⟨uih⟩ /-ɨ/		
ꨆ	⟨uu⟩ /-ū/	ꨇ	⟨uu=⟩ /-ū/	ꨈ	⟨uu:⟩ /-ū:/	ꨉ	⟨uu.⟩ /-ū./
ꨊ	⟨ew⟩ /-ɛ/	ꨋ	⟨ew=⟩ /-ē/	ꨌ	⟨eh⟩ /-ɛ/	ꨍ	⟨ew.⟩ /-ɛ./
ꨎ	⟨ow⟩ /-ò/	ꨏ	⟨ow=⟩ /-ō/	ꨐ	⟨oh⟩ /-ò/	ꨑ	⟨ow.⟩ /-ò./
ꨒ	⟨e⟩ /-è/			ꨓ/ꨔ	⟨em, et⟩ /-é/	(ꨕ)	⟨e.⟩ /-è./
ꨖ	⟨A⟩ /-à, -ā, -ǎ/						
ꨗ	⟨uiw⟩ /-ò/			ꨘ/ꨙ	⟨ot, uit⟩ /-ó/		
ꨛ	⟨ay⟩ /-è/	ꨜ	⟨aay⟩ /-ē/	ꨝ	⟨ay:⟩ /-é/	ꨞ	⟨ay.⟩ /-è./
ꨟ	⟨aa⟩ /-à/	ꨠ	⟨aa=⟩ /-ā/	ꨡ/ꨢ	⟨a:, a⟩ /-á/	ꨣ	⟨aa.⟩ /-ā./
ꨤ	⟨aw⟩ /-ò/	ꨥ	⟨aw=⟩ /-ō/	ꨦ	⟨ah⟩ /-ó/	ꨧ	⟨aw.⟩ /-ò./
ꨩ	⟨aak⟩ /-ài/			ꨪ	⟨ik⟩ /-ái/		
ꨬ	⟨ug⟩ /-àu/			ꨭ	⟨uk⟩ /-áu/		
ꨯ	⟨uing⟩ /-ən/	ꨰ	⟨uing=⟩ /-ēn/	ꨱ	⟨uing:⟩ /-én/	ꨲ	⟨uing.⟩ /-ēn./
ꨴ	⟨ang⟩ /-àn/	ꨵ	⟨ang=⟩ /-ān/	ꨶ	⟨ang:⟩ /-án/	꨷	⟨ang.⟩ /-ān./
꨸	⟨amng⟩ /-òn/	꨹	⟨amng=⟩ /-ōn/	꨺	⟨amng:⟩ /-ón/	꨻	⟨amng.⟩ /-òn./
꨼	⟨ing⟩ /-èin/	꨽	⟨ing=⟩ /-ēin/	꨾	⟨ing:⟩ /-éin/	꨿	⟨ing.⟩ /-èin./
꨻	⟨ung⟩ /-əun/	꨼	⟨ung=⟩ /-ēun/	꨽	⟨ung:⟩ /-áun/	꨾	⟨ung.⟩ /-əun./
꨿	⟨um⟩ /-òun/	꨺	⟨um=⟩ /-ōun/	꨻	⟨um:⟩ /-óun/	꨼	⟨um.⟩ /-òun./
꨻	⟨aang⟩ /-àin/	꨼	⟨aang=⟩ /-āin/	꨽	⟨aang:⟩ /-áin/	꨾	⟨aang.⟩ /-àin./

2つが付け加えられている点で、モン文字とは異なる。

このうち、カッコで括った12文字については、モン語やパーリ語やビルマ語などからの借用語に稀に現われるのみであり、音価も往々にして一定していない。残りの24文字は類繁に使われ、音価が一定している。これら24文字の音価は、次の通りである。

⟨k⟩ /k-/	⟨kh⟩ /kh-/	⟨ng⟩ /ŋ-/
⟨c⟩ /c-/	⟨ch⟩ /ch-/	⟨ny⟩ /ɲ-/
⟨D⟩ /d-/	⟨N⟩ /n-/	
⟨t⟩ /t-/	⟨th⟩ /th-/	⟨n⟩ /n-/
⟨p⟩ /p-/	⟨ph⟩ /ph-/	⟨m⟩ /m-/
⟨y⟩ /j-/	⟨r⟩ /r-/	⟨l⟩ /l-/
⟨w⟩ /w-/	⟨s⟩ /θ-/	
⟨h⟩ /h-/	⟨q⟩ /ʔ-/	
⟨B⟩ /b-/	⟨hh⟩ /ɣ-, ɣ-/	⟨ghh⟩ /x-/

以下に、注意すべき点をあげておく。

a) ⟨hh⟩ の読みのうち、/ɣ-/ は、一部の文末助辞や感嘆詞などにのみ現われる音であり、出現場所が限られているので、もう1つの読みの /ɣ-/ との混同は生じない。

b) ⟨n⟩ と ⟨N⟩ は読みは同じだが、単語による使い分けがある。

c) 普通、字母表には加えられないが、体系上、字母と同列に考えてもよい文字に ⟨yh⟩ /ç-/ がある。

2) 母音符号・末子音符号・声調符号 母音符号・末子音符号・声調符号の3種類は不可分に結びついているので、ここで一括して説明する。表2に、母音符号・末子音符号・声調符号の組み合わせがどのような発音を表わすかを、規則的なもののみ一覧にして示す(字母〈m〉についた場合)。一般的なモン=ビルマ系文字の配列は取らず、分かりやすいように、左右には同じ母音が、上下には同じ声調が並ぶように配列しておく。

なお、声調符号には ⟨=⟩ ⟨.⟩ ⟨:⟩ の3つがある。元来、仏教ポー・カレン文字には声調を表わす別個の符号はなかったが、比較的最近になって、ビルマ文字の声調表記にならった声調符号が導入された。⟨.⟩ と ⟨:⟩ はそれぞれ、ビルマ文字の ⟨.⟩ ⟨:⟩ と字体が同じであり、⟨=⟩ だけが仏教ポー・カレン文字独自の字体である。

以下に、注意すべき点をあげておく。

a) パアン方言には末子音(音節末子音)の種類が乏

しく、母音を鼻音化する要素としての /-n/ が唯一の末子音である。解釈によっては、末子音を設定しない考え方さえありうる。ところが、仏教ポー・カレン文字には末子音符号がたくさんある。これは、末子音符号が母音や声調を表わす要素として機能しているからである。

b) /-i/ /-e/ /-o/ の3母音は、声調 /-/ および /-/ とは普通結びつくことがなく、音韻論上の空き間になっている。これに対応して、正書法上も、この部分が空いた格好になっている。ただし、/-è/ だけは一部の助辞に現われることがあり、これを表わすために (e.) が使われる。

c) /-é/ を表わす綴りと /-ó/ を表わす綴りに2種類ずつあるのは、正書法上の不統一によるもので、同じ単語が異なる綴りで書かれることがある(なお、一部の単語に、(e.) と書いて /-é/ と読ませるものもある)。一方、/-á/ を表わす綴り方に2種類あるのは、一時代前の音韻体系を反映している。(a) で書かれる場合は、元来、音節末に声門閉鎖音が存在していた。これは、音節末の声門閉鎖音を現在まで保存するタボイ方言などとの比較による推定である。

d) <ew> と <ow> はそれぞれ、/-è/ および /-ò/ を表わすために使われることもある。

e) <ung> と <um> はよく混同されるが、これは、比較的若い世代に /-əun/ と /-oun/ を区別しない者が増えてきたことを反映している。

f) (A) には3種類の読み方 /-ǎ, -à, -ā/ がある。/-ǎ/ は軽声である。どれで読まれるかは、単語ごとに覚えておかなければならない。

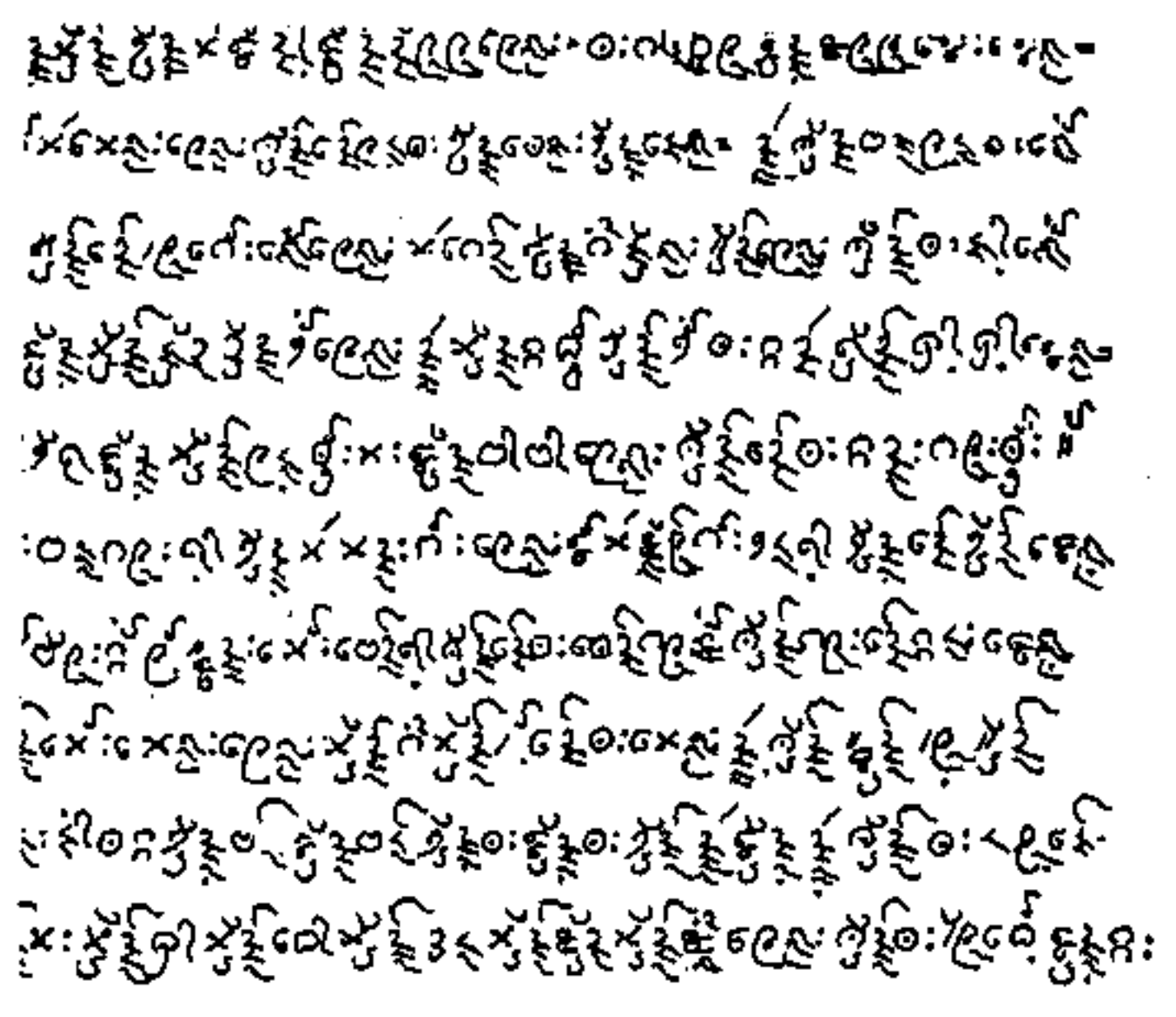
3) 重ね文字 仏教ポー・カレン文字はモン文字のくせを踏襲し、重ね文字を多用する傾向がある。重ね文字というのは、子音字母の下にもう1つの子音字母をいくぶん小さめに書く綴字法である。たとえば ၵ (pt). 子音字母によっては、重ね文字の下部に現われる場合、異体字が用いられるものもある (<l> <r> <j> <n> <m> <ng> など)。

重ね文字の用法には、大きく分けて次の2種類がある。

1つは、重ね文字の下部が介子音を表わす場合である。バアン方言の介子音には /-w-/ /-l-/ /-r-/ /-j-/ の4つがあり、これらは、重ね文字の下部に <w> <l> <r> <j> を置くことによって表わされる。たとえば、/khwā/ 「男」は <khwāa.>, /klā/ 「間、真ん中」は <klāa> と書かれる。ただし、介子音 /-w-/ は、後続母音が /-i/ と /-e/ の場合にのみ、介子音符号を使わずに、<uy> /-wi/, <uiy> /-we/ のように書き表わされる。

重ね文字の用法のもう1つは、/C1ǎC2-/ という音連続を表わす場合である(C1 と C2 は子音音素を表わす)。たとえば、/pǎnā/ 「水牛」は <pnaa=> と書かれ、/θətài/

〈図2〉レーケー文字



「注意」は <staak> と書かれる。/C1ǎC2-/ という音連続は、<C1AC2-> という通常の書き方でも書き表わすことができるのだが、モン語やパーリ語などからの借用語には好んで重ね文字が用いられる。

【使用状況】 現在、カレン州の僧院の多くが仏教ポー・カレン文字を少年僧たちに教えており、カレン州の州都バアンなどではボランティア活動による講習会なども開かれている。また、バアン周辺はポー・カレン人の多い地域であるため、この地域に住むスゴ・カレン人の中にはこの文字の読み書きができる人も少なくないようである。このような状況を見ると、この文字の読み書きがある程度できるカレン人は、万単位で存在する可能性がある。

【文例】 以下に、文例を示す。

လှ်အင်းမေဝ်ဟုံင်ယုဂ်ဟ့။ အင်းစးဂျ်အေး။
(NA qang: mew hhamng jug hhaa.) (qang: Ba: daak qe:)
/nǎ- ʔán mì yòn jàu wá/ /ʔán bá dài ʔé/
「ご飯は食べましたか?」「まだ食べていません」

လိက်လှ်အ် ဆိဒ်လှ်ခိင့်သိုင်။
(lik lA qah chuid lA khuing.Namng)
/lái lǎ- ʔá chǎ lǎ- khēnnòn/
「文字がなければ民族は強固にならない」

【レーケー文字】 カレン州に住むポー・カレン人には、レーケー教という、弥勒菩薩を信仰する独特の宗教がある。この宗教の信者たちが使っているのが、レーケー文字 (Leke script) である。この文字は、おそらく19世紀の中頃に作られたと考えられる。文字の形態は極めて込みいっており、その特徴から、「鶏の足跡」と呼ばれる。レーケー文字の使用は、この宗教の信者に限られているため、ごく小規模である(図2)。

【参考文献】

Kato, Atsuhiko (加藤昌彦) (1995), "The phonological systems of three Pwo Karen dialects", *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 18 (1): 63-103.

Mranmaa Chuihralac Lam:cany' Paatii (1967), *Tuing:rang:saa: Yany'kye:hmu Rui:raa Dhale. Thum':cam' myaa: — Karang* (ビルマ社会主義計画党編『ビルマ原住民族の文化と伝統習慣 — カレン人』) (Rangoon)

Stern, Theodore (1968), "Three Pwo Karen scripts: a study of alphabet formation", *Anthropological Linguistics* 10 (1): 1-39.

【参 照】 キリスト教ポー・カレン文字, スゴ・カレン文字, モン文字

(加藤 昌彦)

フッリ文字 英 Hurrian writing = フルリ文字.

フモン文字 英 Hmong script = パハウ・フモン文字.

フラクトウーア体 独 Fraktur = ドイツ文字.

ブラーフミー文字 英 Brahmi script

【ブラーフミー文字の起源】 ブラーフミー(Brahmī)文字は、カローシュティー文字[▼]と同様にインドの言語を表記するために考案された文字である。後者の使用された時代と地域が著しく限定されているのに対し、ブラーフミー文字はインドのほぼ全地域で、前4・3世紀のマウリヤ(Maurya)朝期から5世紀のグプタ(Gupta)朝期に至るまで長く用いられた。6・7世紀以降は、北インドでシッダマートリカー文字[▼]、ナーガリー(Nāgarī)文字(→デーヴァナーガリー文字)、南インドでタミル文字[▼]、グラント文字[▼]など種々の文字が用いられるようになったが、それらはすべて、このブラーフミー文字から発達したものである(→インドの文字)。

また、この文字は周辺地域に対する影響も大きく、現在、タイ、ビルマ(ミャンマー)、カンボジアなど東南アジアで用いられている文字の多くのものも、ブラーフミー文字起源である。さらに、中央アジア土着のトカラ語、イラン系のコータン・サカ語やトゥムシュク・サカ語、および、(一部の写本で)古代チュルク語(ウイグル語)を表記する文字としても使われた。チベット文字[▼]がこの文字を起源とすることもよく知られている(→インド系(の)文字)。

ブラーフミー文字の解説作業は、18世紀末にウィルキンズ(Ch. Wilkins)らベンガル・アジア協会の会員によって始められた。それはまず、パーラ(Pāla)朝(8~12世紀)、チャウハーン(Chauhān)朝(10~12世紀)、マウカリ(Maukharī)朝(6~7世紀)などに属する、ブラーフミー文字よりは新しいシッダマートリカー文字

やナーガリー文字の諸碑文の解説から始まり、1830年代にはグプタ朝期に属するブラーフミー文字の解説がほぼ成し遂げられている。アショーカ(Aśoka)王碑文を含む最初期のブラーフミー文字(→アショーカ王碑文の文字)の解説は1830年代の後半に急速に進み、1836年にはラッセン(Ch. Lassen)がインド・ギリシア人王の貨幣銘を手がかりに数文字を解説し、1837~38年にプリンセプ(J. Prinsep)がほとんどの文字の解説に成功した。

「ブラーフミー文字(Brahmī lipi)」という名称の最古の用例は、インド西北端のギルギット出土のサンスクリット語の仏典(『根本説一切有部毘奈耶破僧事』の写本、6~7世紀(?)の書写)にある。紀元後の早い時期に成立したこの仏典における仏教徒の用法から、この文字がブラフマン(Brahman)神(梵天)の啓示により作られたとする伝承(中国唐代の仏教書である『法苑珠林』にも伝える)は、必ずしも正統バラモン教の内部にのみ限られたものではないことが分かる。この文字自体の最も古い使用例であるアショーカ王碑文(40例以上現存し、地域によりブラーフミー文字ないしはカローシュティー文字による中期インド語、さらに西方ではギリシア語やアラム語で書かれている)を別にすれば、ブラーフミー文字は宗教の別を問わず、それによって表記する言語(サンスクリット語)と分かちがたく結びつけられることになる。本来の名前が伝えられていないアショーカ王碑文の文字に「ブラーフミー」の名前を与えたのは、1880年代以後の西欧の学者である。インド古文字学の集大成者であるビューラー(Georg Bühler)以来、アショーカ王碑文の文字と後代におけるその発展形を総称して「ブラーフミー文字」と呼ぶことが一般化している。

ブラーフミー文字の起源については、外国起源とするものと、インドで独自に成立したとするものの概略2種の説がある。外国起源としては、北方セム系文字と南方セム系文字に由来を求める2つの説があり、インド起源としては、インダス文字[▼]に由来とする考えと、のちに進入したアーリヤ人が創出したとする考えが見られる。その中では北方セム文字起源とする外国起源説が有力であるが、定説になるには至っていない。

ダーニー(A. H. Dani, 1963)が指摘した北方セム文字とブラーフミー文字の字形の対応を、表1に示す。左右が反転したように見えるものが多い。

実際、文字の組織に、インドの言語の音韻体系に関する深い洞察が反映されているように思われることも確かであり、外国起源説をとる研究者も、ブラーフミー文字の形成にサンスクリット語の文法学者が関係していた可能性を示唆している。ブラーフミー文字とセム